

Title	コミュニケーション・デザインとエージェンシー： グローバリゼーションのメディア学のために
Sub Title	
Author	小川(西秋), 葉子(Yoko Ogawa Nishiaki)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2013
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.63 (2013. 3) ,p.33- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	メディア・コミュニケーション2013 No.63抜刷
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20130300-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メディア・コミュニケーション 2013 No.63 抜刷

コミュニケーション・デザインと エージェンシー

ーグローバルイゼーションのメディア学のためにー

慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所

コミュニケーション・デザインと エージェンシー

——グローバルイゼーションのメディア学のために——

小川(西秋)葉子



「コンピューターが人間の脳のように動かないのはなぜ良いか」

D・A・ノーマン『人を賢くする道具』

▶ 第1節 はじめに

——デザイン実践はエージェンシーになりうるか

本稿は、グローバル・ローカル関係をみる上で、環境に働きかけるエージェンシーとなりうるコミュニケーションのデザイン実践とそれがもたらす意図せざる帰結に着目する。ひと、もの、言説が織り成すインタラクティヴィティを経由しながら「リフレクシヴィティ」の理解と実践にたどりつくための契機を本稿の前半と後半の双方向からアプローチするかたちで試論を行いたい。

消費文化をめぐる英国の社会学およびカルチュラル・スタディーズは1990年代において一世を風靡するかのようであった（具体的な研究については、末尾の参考文献を参照）。その背景には、ヨーロッパ統合への動き、英国の景気回復基調の兆し、そして、新しい文化産業や文化消費を助長する起業文化（enterprise culture）礼賛の流れが影響していたことは明らかだろう。しかし、グローバルイゼーションと消費をめぐる文化社会学は環境あるいは持続可能性といった論点には、ほとんど言及してこなかった。なぜなら、その研究関心は、S・ホールらの警告にもかかわらず（Hall and Jacques, 1989）、伝統を革新するはずの新しい時代と新しい文化を賞賛する立場に偏在してきたためである。その加熱ぶりは、日本のバブル経済時の熱病を思い起こさせるほどであった。

他方、カルチュラル・スタディーズにおいて、研究者の語る位置と研究対象ひいては研究プラクティスとの関係を問う「ロケーション」あるいは「ポジショナリティ」についての議論は、一定の説得力をもつものの、いまだ構造とエージェンシーの循環性と創発性を考えるまでには至っていない。

本稿前半は、三段階において論述する。まず、デザイン実践を、グローバルなものやローカルなものとの織りなす相互作用が働く〈場〉におくことを提案する。次に、具体例として、地球環境についての意識が高まるなかで、低公害車（sustainable automobile design）の生産・消費・表象・規制・アイデンティティをめぐるインタラクションの諸相を、認知科学を踏まえた経済学とカルチュラル・スタディーズの二つの立場を踏まえて考える。だが、そのいずれの立場も、資本主義システムにおける生産と消費を前提にしており、グローバル化が進む中で、環境との新しいリフレクシヴィティを探るにはまだ至っていない。そ

こで、最後に結論に変えて今後の論争の焦点を提起する。

このような企てにより、グローバルイゼーション研究を、科学のカルチュラル・スタディーズに、あるいは科学技術の社会学よりさらに学際的な展開を見せつつある科学の社会科学 (Social Studies of Science) といった諸分野に接合する糸口を明らかにしていこう。それによって、本書がいかにして乗り越えられるべきものなのか、また、克服されうるものなのか、その一端を示すことができるだろう。

▶ 第2節 グローバル-ローカル関係という〈場〉の中のデザイン実践

コミュニケーション研究では、狭義の定義として、インタラクティヴィティを双方向性として捉え、一方的な情報の押しつけではなく対話に近い概念とみなす見方がある。ここでは、もっと広義の意味で、すなわち、社会的なコンテキストのなかで、デザイン実践を捉えたいと考える。第一に、「グローバル-ローカル・モデル (global - local model)」にひきよせてみよう。依然論じたように (小川, 1996), このモデルは、社会変容をみる上で、グローバルな諸力の相互作用に注目し、社会の時間制と空間性、さらには生態系や環境との関連といった〈場〉を重視するアプローチといえよう。

もう少しわかりやすい比較の事例を挙げると、この視点に関連するものとして、「世界都市 (Global city) 論」がある。それは、世界システムの中で、都市が国境を越えて、どのようにネットワーク化され、階層化されているか、さらには、世界システムや国と国内といった上位レベル、下位レベルなどの社会変容とどのように影響し合っているのかを検討する仮説である。(町村, 1996; Sassen, 1996)

グローバルな視野から社会過程を全体的にみていく点では共通しているものの、世界都市論とグローバル-ローカル・モデルの間には大きな違いがある。かなり図式化すれば、それは前者が、主に経済的な側面から、都市間のネットワークを見ていくのに対し、後者では、例えば、政治・経済・産業・軍事とそれに通底する文化とコミュニケーションといった次元をひとまず区分するとともに、都市や国家に還元されないローカルな局地性・局所性に注目する点である。

さらに、グローバル-ローカル・モデルにおいて特徴的なのは、次の三点である。第一に、ローカルで日常的な時間-空間が、グローバルな広がりの中で再構成されること。第二に、重層化されたさまざまなネットワークのなかで流通するうちに、ひと・もの・情報・資本などが、もともとのコンテキストから離れた別のコンテキストにおいて新たな意味を与えられる「脱埋め込み (dis-embedding)」と「再埋め込み (re-embedding)」のメカニズム (具体的な事例として、環境プランニングとしてのセントラルパークがもつ自然の文化的な意味の考察については、(Ogawa, 1992; 小川, 1997 などを参照)、最後に、全体と部分を構造化していくリフレクシヴィティ (reflexivity) などがあげられるであろう (小川, 1996)。

もともと、システムの再生産と変容がなぜ可能かという問題意識から発しており、またオートポイエーシス (Maturana and Varela, 1980) などの同時代の思想から影響を受けている点で、グローバル-ローカル・モデルは、生命論について他分野の議論と、思いのほか共通性がある。例えば、上田は、人工物環境システムの三つのレベルとして「部分と全体・自己組織化・自己言及性 (内と外)」を挙げている (上田, 1997: 136-137) が、これを社会を対象に論じたのがグローバル-ローカル・モデルとみることができる。さらに、清水博 (清水, 1999) は「共創」をキー概念として、特定の〈場〉における秩序形成を論じていき (小川, 1999) が、その〈場〉を気球規模に拡大すると、それはそのままシナリオが絶えず変化していくグローバルな社会編成と見立てることができるだろう。

最後に、グローバル・ローカル・モデルの中で、最も注目すべきなのは、「意図せざる帰結」(unintended consequences)という概念である(小川, 1996)。それは、局域的に個々の行為者がインタラクションした結果、全域的には当初の目的とは異なる結果をもたらすこと、それと同時に、異なった局域間や階層間での相互作用が生まれるために、社会の帰結がここのアクターの振舞いの総和には還元できないということを意味している(Giddens, 1984)。つまり、グローバルとローカルの相互作用のなかで、デザイン実践を捉えること、それはとりもなおさず、新しい秩序の創発におよぼす、そうした〈場〉のもつ役割をみていくことにつながってゆくのだ。

▶ 第3節 地球環境と低公害車デザインのインタラクション

第二に、デザインするという行為を、ここでは、一つの、あるいは複数の実践(practices)と捉えたい(小川, 1988)。例えば、認知科学や認知工学の分野においてD・A・ノーマンは、人間がエラーをすることを前提に人工物を設計する行為の必要性(Norman, 1988; ノーマン 1997 = 1998)や、ユーザーの期待するアフォーダンスに応えるものとしての人工物のデザインの重要性(Norman, 1992)を強調してきた。アメリカ認知科学会の初代会長を務めた彼は、その後アップル社のデザイン顧問に就任し、自身のアイデアを実際のインターフェイス・デザインにおいて具現化してゆくことになる。それに呼応して、本稿では、デザインとは、時間・空間において作用し、現実を変革しうるプラクティスと捉えたい。それは、哲学者のN・グッドマン(Goodman, 1978)が論じたような手持ちの知識を改編することで新しい世界を作り出す行為であり、それを生態系や物質循環系を含めた水準で展開することにした。

それでは、いままで延べてきたグローバル・ローカル関係とこのデザイン実践とはどのように関わりあうのだろうか。ここでは、試論として、地球環境と低公害車のデザインのインタラクションをみていこう。ただし、それは、これまで前述の科学の社会科学やテクノサイエンス研究(Technoscience Studies)の分野でなされてきた方法とはかなり異なったアプローチをとることになる。従来、電気自動車をはじめとした交通機関の開発や振興の研究は、その過程で人間だけでなく人工物の役割を重視するアクター—ネットワーク理論(actor-network theory)によって論じられてきた(Latour, 1996; Callon, 1986, 1987)。だが、それらは、開発や振興のプロセスをミクロに描く作業にとどまり、ポストフォーディズムの産業構造、いわんやグローバルイゼーションなどのマクロな社会変容はまるで射程の外にあった。

本稿ではあえて、一見、社会学とは程遠くみえる二つの立場を手がかりにし、グローバルとローカルの相互作用を視野におさめる試みを行いたい。そのためには、まず、経済学と認知科学を統合しようとしている西山賢一の議論、次に、カルチュラル・スタディーズにおける文化の回路という議論を参照しながら進めることになる。

(1) デザインの階層化と統合におけるグローバル・ローカルな外圧

まず、生態学的な制度の進化を念頭に置いた西山(西山, 1997)の議論の前提を簡単に要約しておこう。第一に、伝統的な経済学の枠の外におかれていた生産に関する技術と消費者の好みに注目するとともに、自然環境との関係性を再確認する重要性である。第二に、認知を社会的・物理的な環境に埋め込まれているとみる状況認知(situated cognition)(Lave, 1991)、分散認知(situated cognition)(日本認知科学会, 1994)などの諸研究や、人工物と分業と規制によって活動の組織化を考察する活動理論(activity theory)(Engeström, 1990)などによって、生活活動と消費活動をみなおす姿勢である。

さて、これらを前提として、西山（西山，1997：155-157）は技術の階層性に注目し、低公害車の生産に従事する技術者たちが現場で取り入れている技術を、「操作」と「行為」と「活動」の三つのレベルに分けて論じている。第一に、「操作」のレベルとして考えられるのは、常識化された暗黙知や身体化された知であり、内燃機関を利用した自動車の生産について100年の蓄積をもつ技術についての知識やノウハウ、そしてマニュアルなどがそれにあたる。

第二に、「行為」のレベルとしては、性能を上げてコストを下げるために新たな材料や方式を模索する段階でみられる。例えば、電気自動車の電池を従来の鉛からニッケル・カドミウムにかえる際には、これまでとは違った知識を、実験を繰り返すことで探し求めようとする。これは、個々の目的をもって技術を工夫しようとする行為にかかわるといえる。

第三に、「活動」のレベルとしては、個々の操作や活動が、目的や対象のもとで統合される階層が考えられる。ここでは、生産者のコミュニティが、分業を行いながら、自然や資源を利用していくのだが、単なる技術の積み重ねではなく、生産活動の主体のもつ世界像が大きく作用しているといえる。具体的には、地球環境への配慮であったり、新世代の自動車づくりにかける夢といったイメージが、技術を生み出す実践にかかわっていると考えられる。

他方、技術者たち、あるいは広義の企業がおかれている環境からの圧力に目を向けてみよう。まず、グローバルなレベルでみると、ISO（国際標準化機構）から出されている国際規格がある。ここでは、製品の原料調達から廃棄に至るライフサイクル全体で環境の負荷を低下させる「ライフサイクル・アセスメント」（羽二生，1998）に基づく環境管理と環境監査が前提とされている。現在、この規格に合格する技術の実現が、世界市場に進出する大前提となりつつあり、それが企業や技術者への外的圧力として作用しつつある（西山，1997：189）。

また、グローバルなレベルとローカルなレベルでの圧力の内容がいささか異なる場合もある。これを低公害車の市場を例に見てみよう。地球全体の問題としては、温暖化をひきおこす炭酸ガスの削減が注目されることが、多いとされているが、日本の首都圏と阪神地域では二酸化硫黄などの窒素酸化物の排出をいかにおさえるかが環境基準を達成するための急務となっている。近年、日本の自動車市場では、ディーゼル・エンジンを搭載したRV車が人気を集めているが、これらの地域では逆にディーゼル車の排出するSPMなどの浮遊粒子物質と窒素酸化物の両方を減少させられる自動車が求められているといえる。（西山，1997：188-189）。

以上、西山（西山，1997）の把握を、グローバル・ローカル・モデルを使って再構成してきた。ここでは、技術の階層化と統合のプロセスを明らかにする点、さらに、環境からのさまざまなレベルの圧力によって、生産活動と消費活動に作用する〈場〉の役割に注目している点が評価できるといえるだろう。さらに、西山（西山，1997）は、「制度の進化」という時間的な側面を踏まえて、カウフマン（Kauffman, 1995）やそれ以外のサンタフェ研究所の諸研究とはやや異なった立場から、複雑系としての経済を考えるヒントを展開している。

(2) カルチュラル・スタディーズと文化の回路における循環と創発

今まで述べてきた議論は、全体的な発想としては興味深いものの、依然、生産（production）と消費（consumption）を基礎におく一方、細部に至る正確さの点では限界がある。また、環境とインタラクティブに作用するデザインを、グローバル・ローカル関係の〈場〉において考えていくためには、上に述べた考察だけでは、十分とはいえない。

そこで、もう一歩進めて、グローバルに広がった市場、さらには、さまざまなレベルの

規制という二つの側面での社会的な圧力を重視しなければならない（林，1998）。つまり、一方で、世界市場で優位なものが実際の基準を作っていくというデファクト・スタンダードの問題、他方で、1997年に地球温暖化を防ぐべく先進諸国の排出ガス規制をめぐる京都会議（COP3）で論じられたように、地球規模あるいは各国の利害を相互に調整する中で課せられる環境基準や具体的な規制（regulation）の問題である。

さて、それ以外では、グローバル・ローカルな〈場〉で、どのような力が働いているのだろうか。この点について、もう少し幅広く見るために、本稿の冒頭でふれたカルチュラル・スタディーズの分野で論じられている「文化の回路（circuit of culture）」（du Gay, Hall, Janes, Mackey and Negus, 1997）を援用しつつ考えてみよう。このモデルの詳しい考察は他に譲るが（小川，1999a），一言でいうと，それは，グローバルな資本主義における市場と公共領域の拮抗のなかで，文化をさまざまな実践活動（practices）の流れと生産（production）・消費（consumption）・表象（representation）・規制（regulation）・アイデンティティ（identity）などの諸契機を接合する相互作用の中で捉える視角だということができるだろう。

歴史的にみると，1980年代から，英国・米国・日本においては，情報通信・金融・サービスなどの分野で規制緩和が進んできた。その規制緩和の実情は，国ごとにかなり異なるものの，いずれもグローバルな舞台で熾烈な競争に巻き込まれることになったのである。以前，S・ホールが示した意味の生産と消費に基礎をおくエンコーディング／デコーディング・モデル（小川，1999a）と関連を持ちつつも，このような現実の変化をなんとか取り込もうとしていると考えられる。そのために，グローバル資本主義における規制の役割や，ポストフォードイズムのイメージ経済における表象の影響，さらには差異化された多品種少量生産を指向する人々のアイデンティティなど，近年，重要性を増してきた諸契機を新たに付け加えているのである。

この〈場〉においてしてみると，先に述べてきたグローバルあるいはローカルな諸力は，すでに指摘した以外に，どのような諸契機において作用するのだろうか。まず，表象のレベルに注目するならば，メディアやコミュニケーションによる世論形成，例えば，「低公害車を生産するエコ企業」をアピールするコマーシャルなどの広報活動や，「最新の低公害車の横でVサインをして微笑む私」を撮影した写真を見て幸福感にほくそ笑む一般消費者の日常的な営みなどが関わっているといえる。また，オゾン層破壊というグローバルな環境問題に対処するため，有毒物質についての専門的な科学技術の知識を，「どの商品を買ひ，どの商品は買わざるべきか」というライフスタイルの変更になぞらえて一般向けにわかりやすく伝えるNPOの意見広告などのコミュニケーション活動の役割も増大しているといえよう（Jamison, 1996）。

さらに，アイデンティティという観点からすると，「グローバル・シティズン」にせよ「地球倫理論者」あるいは「エコロジスト」にせよ，生産者や消費者，アイデンティティを自らに与えるのか，それによってどのような世界像を作り上げていくのかといった問題なども，このモデルを使うことで浮かび上がってくることだろう。表象の事例で示した「低公害車を生産するエコ企業」「最新の低公害車の横でVサインをして微笑む私」，そして，「環境コンシャスな消費者とそれを啓蒙するNPO」なども，アイデンティティとして構築する幅広いリソースを描き出す一助になるはずである。

しかし，グローバル・ローカルな〈場〉において，こういったアイデンティティは，常に予定調和的な世界を作り出し，そこでデザイン実践にいそむわけでは決してない。エコロジーをめぐる権利と義務にかかわる「グローバル・シティズン」像を素描したJ・アリーは，その多様性を指摘している。そういったエージェンシーの壮絶な駆け引きについて具体的なイメージを考えてみよう。例えば，多国籍企業による世界征服をねらう資本

家に対し、国際機構によって規制をかけようとする改革主義者、技術の進歩により合理的な環境マネジメントを行おうとする管理者、さらに、インターネットなどのコミュニケーション手段によって既存の組織による管理を超えて非国家的に活躍しようとするネットワークワーカーなどが存在する。さらに、先住民や地域自然保護運動などローカルな自然にこだわることで地球環境のケアに関わる者がいる一方、移動を常とし、様々な環境や文化に対しコスモポリタンな態度をもった者たちもみられる。また、「人種差別主義者」がいるのと同様、既述の環境主義者たちに対し、攻撃的な対応をする者たちも、そのアリーナには見出すことができるだろう (Urry, 1998)。

こうみえてくると、環境に働きかけるデザイン実践といっても、その担い手たちのもつ手段、関心、あるいはポジティブかネガティブかという態度までもが、かなり異なっていることが理解できる。だが、実際には、一個人のなかでも違ったアイデンティティの衝突が起こることもあれば、それらが新しくハイブリッド化される可能性もある。また、グローバル・ローカル関係のアリーナ自体も当然、重層的であろうし、刻々と変化する国際情勢のなかでは、異なったエージェンシー間での多角的なコラボレーションや協力関係もひっきりなしに取り結ばれる複雑性をはらむに違いない。

以上、ここでは、カルチュラル・スタディーズにおける文化の回路のモデルを用いながら、グローバル・ローカル関係における環境とデザイン実践の関わりをみてきた。とりわけ、(1)で論じた認知科学と経済学のアプローチではみえてこない「規制」「表象」「アイデンティティ」といった諸契機に注目した。より長期的なサイクルでみていけば、この規制や表象やアイデンティティが、生産と消費をモニターし、新たなデザイン実践を創出するプロセスが明らかになることだろう。また、文化の回路のなかでは、その逆の循環もありうることだろう。すでに、第二次大戦直後のハリウッド映画というメディアにおけるデザイン実践に、この循環と創発のプロセスがみられることが、指摘されている (小川, 1988)。本稿では、その可能性を示唆するにとどまったが、ここに、リフレクシヴなデザイン実践の考察を発展させる水脈があらうことは疑いない。

▶ 第4節 リフレクシヴィティを経由したグローバルでローカルな感性へ

本稿は、文化の消費の次なる課題として、グローバリゼーションと環境に注目し、それらを架橋するエージェンシーとなりうるリフレクシヴなデザイン実践の可能性を探るものであった。まず、デザイン実践を、グローバルなものとローカルなものの織りなす相互作用が働く〈場〉におくことを提案した。次に、具体例として、地球環境についての意識が高まるなかで、低公害車の生産・消費・表象・規制・アイデンティティをめぐるインタラクションを、認知科学を踏まえた経済学とカルチュラル・スタディーズの二つの立場を踏まえて考えてきた。だが、これらの立場は、資本主義システムにおける生産と消費を前提にしており、グローバリゼーションと環境に働きかけるデザイン実践の新しいリフレクシヴィティを示唆するにとどまった。

そこで、今後の課題として、三点ほど指摘しておこう。第一に、どのような時間的スパンと空間的スケールで考えるかによって、グローバル・ローカル関係におけるデザイン実践の行方は変容せざるをえないことである。すでに論じたように、国際規格やライフサイクル・アクセスメントなどに対する社会的な関心の高まりはそれを体現している。第二に、デザインを「世界に対する介入の実践」と捉えるならば、その考察は必然的に短期的な市場だけでなく、長期にわたる政策の変化をみていくべきである。あるいは、もっと広く、グローバル・ローカル関係における社会のあり方そのものの変遷を再考する必要性をつきつけられることだろう。とりわけ、統合化と差異化が加速的に同時進行するなか、産業構

造や価値観の面では、ポストフォーディズムやポストモダニズムの重要性が指摘されている。さらに、一元的で、画一的な人間像ではなく、ハイブリッドなアイデンティティの文化的な意味が強調される状況は、いま一度、考慮されるべきである。

第三に、グローバルとローカルな諸力の相克のなかで、地球社会の未来のシナリオを描くのは、われわれ自身だということである。自ら内部観察者として（Adam, 1990；郡司・松野・レスラー, 1997）のロケーションを踏まえつつ、デザインという手法であるいは、政策提言などの諸手段によって現状の世界のありかたに介入することで、はじめて、リフレキシヴィティを踏まえたエージェンシーとなりうるのである。いいかえれば、社会とのインタラクティヴィティ、ひいてはリフレキシヴィティを模索する創造的な実践は、それ以外にはありえないといえるだろう。

▶ 第5節 ポストモダン文化とコモン・カルチャーにおける免疫不全の臨床美学

ここまで本稿の前半においては、アメリカの認知科学者かつ実践家でもあるD・A・ノーマンの発想をさらに発展させ、グローバリゼーションにおけるデザイン実践について論じてきた。本稿の後半では、そのような未来の地球生命体のありかたを規定するデザイン実践の一方で第2節で触れたグローバリゼーションの「意図せざる帰結」が集合的な身体感覚というまさにその〈場〉において発現している状況を考察する。

そのような拮抗するコミュニケーション状況を例示する最も触発的な考察のひとつは、コモン・カルチャーをめぐる文化社会学においてみられる。「コモン・カルチャーか、アンコモン・カルチャーか」においてM・フェザーストンはこれを、アバークロンビー、ヒル、ターナーらの『支配的イデオロギー・テーゼ』（Abercrombie, Hill and Turner, 1980）とR・ウィリアムズのコモン・カルチャー論（Williams, 1989 他）の両側面から論じている。（Featherstone, 1991）前者は、グラムシ、アルチュセールのイデオロギー論およびヘゲモニー論全盛の時代に一石を投じた論考であり、マルクス主義の理論としても、歴史的な事実としても支配的イデオロギーが抵抗なく皆に受け入れられるという状況を想定するのは不適切だとするものである。さらに、後者のウィリアムズのコモン・カルチャー論におけるコモン・ピープル（大衆・民衆）とコミュニティ（共同体）の議論に依拠しながら、フェザーストンは「共有された文化（極端に違約すれば卑俗な高級文化）」と「コモンでない文化」の可能性を探るなかで大衆文化とポストモダン文化の普及について論じていく。コンテキストはかなり異なるが、ハートとネグリの『帝国』（Hardt and Negri, 2002）を想定して読むと、グローバリゼーションとマルチチュード概念をめぐる、何かしら新しい思考の地平を発見したような胸のすく気分になるのである。

▶ 第6節 消費文化とアレルギー文化にみるリスク環境の共有化

本稿前半のコミュニケーションデザイン実践との関係においてフェザーストンの著作の今日的な意義を再発見するために、ここでグローバリゼーションを踏まえた別の角度から読み直しを行ってみたい。ここでは、それを仮に「アレルギー文化」と名付けておこう。そこには、三つの前提がある。第一に、後期近代社会において化学物質や核、狂牛病など日常的で目に見えない環境リスクに抗する「リスク社会」を論じたU・ベック（Beck, 2000）と、これを「リスク文化」の観点から美学的に読み替えたS・ラッシュ（Lash, 2000）をもじっての試みである。第二に、現在、デフレ圧力化の価格競争のなかでグローバル化の波が衣食住の諸領域におしよせ、海外輸入製品から遺伝子組み換え作物、ウィルス、疾病など膨大で、多彩なフローの流入となっている日本の現状がある。最後に、その

ようなフローに交わる場におかれた身体と健康および公共性の問題があろう。日本の人口の約3割から6割がアトピーや花粉症をはじめとした何らかの環境アレルギーをもち、約1割が日常生活環境における大気や水、建築物から衣食住にかかわるすべての物質に含まれる微量の環境ホルモンや発がん性物質、そして重金属への曝露により免疫系、脳・神経系・内分泌系障害を訴える化学物質過敏症であるという（Williams, 2001）。

そのような諸条件を踏まえたとき、消費文化について論じるべき課題は、いったいどのように変貌するのであろうか。そして、そこにおける生と文化の可能性はいったいどのようなものなのだろうか。「文化変動と社会的実践」において、フェザーストーンは、ポストモダニズムの特徴としてリアリティがイメージへと変容し、永遠の現在へと時間が断片化する統合失調症的な諸経験を強調するジェイムスンを批判する。また、アーティスト、知識人、学者、文化人などの象徴生産に関わる者たちだけでなく、批評家たちや他の社会集団たちが日常生活の諸実践において、どのようにポストモダンな商品や諸経験を使用するのかを問い直すべきだと論じている。

「アレルギー文化」の観点からするならば、ポストモダン、より狭義には、東の間の情報を重視するフレキシブルな生産によって生み出された商品は、ある意味で悪夢である。例えば、象徴生産であるはずの工夫を凝らしたデザインのポスターは、記号ではなく、モノとして、あるいは、不気味な異物として立ちあらわれる。短期間の使用と廃棄を前提としたポスターの採算をとるために使われた安全性の低いインクと紙は、ある種のアレルギー患者にとっては、有害物質である。いくら美的に印刷されていようと、揮発した化学物質は、気体として吸引され、ほんの数秒で免疫細胞やアレルギー関連の細胞（肥満細胞）に刺激が伝達され、全身にアナフィラキシー・ショックが走る。記号を読み取りながら遊歩するフラヌールのそれ（Featherstone, 1991）ではなく、ここでの経験は解読する以前に立ち崩れるような全身感覚であり、遠ざかる意識のなかでその場の危険から身を守るためにかろうじて保った理性による実践である。

「ライフスタイルと消費文化」では、ブルデューの論じるスタイルと美のヒエラルキーによって形成される「場」、あるいは、社会空間を、時間や流行、変革可能性などの、より動態的な視点で捉える必要性が強調されている（Featherstone, 1991）。さらに、「都市文化とポストモダンなライフスタイル」では、都市社会学や建築論に触れながら、「日常生活の審美化とスタイル化」が都市においても展開し、折衷主義的な建築スタイル、まなざし、シェントリフィケーションなどによって満たされていく過程の文化的意味に注目している。

フェザーストーンがこういった論考を用意した1980年代から1990年代に顕著となりつつあった諸現象は、アジアをはじめとした世界のある部分ではさらに際立ったものになっている。逆に、「アレルギー文化」からみれば、まったく見過ごされている諸側面も多いといえる。

ラッシュは、合理性と知識を持って世界的な環境リスクに対応する「リスク社会」の階層性を批判し、より水平的な社会関係を強調する「リスク文化」というゆるやかな共同体像を提唱した（Lash, 2000）。しかし、筆者がここで論じている「アレルギー文化」は、ラッシュの意見とも異なり、知識の点でも、美学的な面でも、きわめて階層的である。すなわち、アレルギーに対する科学的な理解と教養をもっていればいるほど、美的なヒエラルキーの最上位に自ら位置することができる。たとえば見た目は悪くとも生産者の銘記された無農薬の野菜を食べること、世間の流行からはずれた形であるが有機コットン素材で作られた洋服を身にまとうこと、そして、誰がなんといおうとも自分の肉体感覚だけを信じてそれらを選択すること、そしてそういった行為が押し付けられたものではなく、無知な大衆から自己を卓越させる必然かつ自然な行いなのだとする自己陶醉などである。そこでは、知こ

そが美であり、それをライフスタイルとして実践することが最高にスタイリッシュな生き方となる。そのスタイルあるいはスタイル化は、かつてのフラヌールたちやボヘミアンな芸術家たちの美学的態度と通じるところもある。

都市もまた、その知と美をディスプレイする舞台であるものの、自由闊達な遊歩者たちとは異なり、「アレルギー文化」に関わる者たちにとっては最も危険な場所である。いつもどこかで繰り返される再開発の結果、掘り返される汚染土壌と新旧の建設資材から空气中に放出される有毒ガスや、ひとの移動や交通の利便性、情報化がもたらす恩恵の影の部分として増加する電磁波や振動などの低周波に対し、限りなく脆弱な人口も女性や若年を中心に顕在化しつつある。そこでは、人の集まる場所に近寄れない広場恐怖症（Agoraphobia）（Brooks Gardner, 1994）とも似て、移動は極度に制限されている。

また、反グローバル運動における芸術の実践も両刀の剣となる。クラインは、大企業の広告に上書きする都市のグラフィティを一つの文化戦略として注目した（Klein, 2001）。どぎつい色彩のラッカーや塗料で壁や塀やポスターに落書きされた痕跡は、ある者たちにとっては、美的な記号であり抵抗の証であるかもしれない。だが、まさにその媒体や原料が雨に濡れ、太陽熱で気化して発する異臭は、アレルギー患者にとっては、ふだん道路を歩く自由すら剥奪してゆく恐るべき凶器へと変貌しうるのである。

▶ 第7節 グローバルな文化と共有される未来

「消費文化とグローバルな脱秩序化」においてフェザーストンは、ヴェーバー、デュルケム、ジンメル、ベル、とりわけ長期の文化変動プロセスに注目するエリアスを基礎に、聖なるものと世俗化、アノミーや無秩序・脱秩序化（disorder）といった諸概念とのかかわりにおいて、消費文化とポストモダニズムの拡大を再考している。（Featherstone, 1991）さらに、「結語：多様性のグローバルイゼーション」では、ヨーロッパ統合という現実において、B・アンダーソンやA・スミスのナショナリズム論、R・ロバートソンのグローバルイゼーション論やS・ルークス、ひいてはP・シュレジンジャーのヨーロッパ・アイデンティティ論などに言及しつつ、社会的な諸関係の今後を問う議論を展開している。経済や文化のフローの増大や、国家を越えたユニット化やブロック化を示唆しつつも、デュルケムとその人類教（the religion of humanity）概念に言及し、きわめて分化と複雑化が進んだ文化と社会における普遍性や人間であること（humanity）の意味を再度想起させる部分は非常に興味深い。

ここで、「グローバルイゼーション」という社会の変動を、ここまで注目してきた「ポストモダン」「消費者（コンシューマー）」「共有（コモン）」「アレルギー」というキーワードと交差させたとき、おそらく「文化（カルチャー）」とともに「未来（フューチャー）」を語らざるをえない。フェザーストンの原著のもとになる諸論文が発表されつつあった1987年、ノルウェー首相も歴任したG・H・ブルンドラントによってまとめられ、環境開発において現在のみならず未来の世代への責任を訴える「持続可能な発展（sustainable development）」を強調した国連レポートのタイトルはその触媒となる（World Commission on Environment and Development, United Nations, 1987）。普通の、大衆の、民衆の、そして人々の……といった文脈でこれまで「文化」を考察してきた「コモン」という言葉が、地球環境とそこで過去、現在、未来に生きる人間を総称して、「かけがえない未来（Our Common Future）」という題名に使用された時の字面と音の響きは、いまさらながら不思議なインスピレーションを与えてくれる。

「グローバルイゼーション」のなかでは、「普通の」人々とは、そして「消費者」とは、いったい誰のことなのか。その者たちが「共有する文化」とは、将来どう変化するのか。それ

は、連帯を促すのか、分化を促すのか。「アレルギー」をもつ者たちは、いったいその共有文化に加わってゆくのか、それとも全く異なる独自の文化を創造するのか。それは「ポストモダニズム」あるいは「高度近代」の帰結なのか。

現実には、同じようにアレルギーや環境関連疾患をもっていたとしても、先進国と途上国、あるいは、その購買力の多寡によって、分化やライフスタイルは、いみじくも分断され、厳密に差異化されてしまう。逆に、しばし、アレルギー患者は、他の健康至上主義者たちやエコロジストたちとともに地球とからだに良い商品と知識を目指して奔走する消費者集団として、新たな階級を形成することもある。その意味では、フェザーストンの指摘は、半分的中している。だが、「アレルギー文化」の観点からすれば、自らの身体にあわせて食欲かつ手厳しく商品を値踏みするこの集団は、単なる消費者にとどまらず、日常生活の営みそのものにおいて社会的責任を追及するステークホルダーとなりうる（小川，2001；谷本，2003）。

また、本稿前半でふれたS・ホルの文化の回路におけるアイデンティティ（du Gay, Hall, Janes, 1966）の再発見の機会ともなるだろう。すなわち自己の身体感覚から発しながら、それがグローバリゼーションのひとつの帰結であり、生産と消費の場においても同様のリスクに曝される誰かがいるはずだと気づいたとき、「アレルギー文化」は、生産消費活動の安全性と品質保証をはじめとして途上国における労働搾取の防止など、企業や行政とともにグローバルな連帯に発展する可能性もある。このような側面は、高齢化と身体についてはすでに注目していたにせよ、1990年前後のフェザーストンにとっては予想だにできなかった展開かもしれない。

最後に、本稿の冒頭に掲げた引用に立ち戻ることで結語にかえよう。コミュニケーションに関わる企図は常に意図せざる帰結と背中合わせに実践される。そこで一枚岩に見えたエージェンシーは実際にはひとやものや言説が入り交じったハイブリッドな存在であることが再露呈される。D・A・ノーマンの挑発的な問いが示すように、メディアや人工物のデザイン実践は人間の身体そのものをそして文化と自然のありかたさえも未踏の大地に放り出すのである。

●参考文献

- 伊丹敬之（1999）『場のマネジメント』NTT出版
 伊藤公雄・橋本満（編）（1998）『はじめて出会う社会学』有斐閣
 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉（編）（1996）『岩波講座現代社会学 21 デザイン・モード・ファッション』岩波書店
 今田高俊（1986）『自己組織性』創文社
 上田完次（1997）『人工物環境の生命論パラダイム』吉川弘之（監修），田浦俊春・小山照夫・伊藤公俊（編）
 小川葉子（1998）「メディア・ディスコースと都市の認知」『一橋大学大学院社会学研究科修士論文』
 小川葉子（1996）『グローバリゼーションと現代社会理論』梶田孝道（編）
 小川葉子（1997）「環境プランニングへのコミュニケーション論的アプローチ」，インタラクティブデザイン研究プロジェクト第5回研究発表
 小川葉子（1999a）「グローバリゼーションとリプレゼンテーション」『メディア・コミュニケーション』49, 91-107 頁
 小川葉子（1999b）「グローバル・ローカル・インターフェイスにおける表象・文化・アイデンティティ」『Keio SFC Review』5, 99-105 頁
 小川葉子（2001）「グローバル・リフレキシビリティはいかにして可能になるか：環境の『構築』におけるコスモポリタンとローカル，そしてユニヴァーサル」，第49回関東社会学大会テーマ部会C「グローバリゼーションと市民社会」，東京女子大学
 梶田孝道（編）（1996）『国際社会学〈第2版〉』名古屋大学出版会
 加藤尚武・松山壽一（編）（1999）『科学技術のゆくえ』ミネルヴァ書房
 郡司ベギオ・幸夫・松野孝一郎・オットー・E・レスラー（1997）『複雑系の科学と現代思想：内部観測』青土社
 厚東洋輔（1991）『社会認識と想像力』ヘーベスト社
 嶋田厚・柏木博・吉見俊哉（編）（1998）『情報社会の文化3 デザイン・テクノロジー・市場』東京大学出版会

- 清水博 (1999)『新版 生命と場所』NTT 出版
- 壽里茂・北澤裕・桜井洋 (1996)『ライフスタイルと社会構造』日本評論社
- 谷本寛治 (編著) (2003)『SRI 社会的責任投資入門』, 日本経済新聞社
- 友枝敏雄 (1998)『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣
- 西山賢一 (1997)『複雑系としての経済』NHK ブックス
- 日本建築学会 (編) (1997)『人間 — 環境系のデザイン』彰国社
- 日本認知科学会 (編) (1994)『認知科学の発展 7 特集: 分散認知』講談社サイエンティフィク
- 羽二生倫之 (1998)「次世代自動車のライフサイクルアセスメント: 代替燃料自動車および電気自動車の CO2 排出量評価」『慶應義塾大学大学院理工学研究科修理論文』
- 福島真人 (編) (1995)『身体の構築学』ひつじ書房
- 町村敬志 (1996)『グローバリゼーションと世界都市形成』梶田孝道 (編)
- 松岡由幸 (1998)「デザイン工学からみたインタラクティブデザイン」『平成 9 年度慶應義塾大学学事振興基金共同研究報告書』, 慶應義塾大学理工学部インタラクティブデザインに関する調査研究
- 松本三和夫 (1998)『科学技術社会学の理論』木鐸社
- 吉田民人・鈴木正仁 (編著) (1995)『自己組織性とはなにか』ミネルヴァ書房
- 吉川弘之 (監修) 田浦俊春・小山昭夫・伊藤公俊 (編) (1997)『新工学知 3 人工物環境と知』東京大学出版会
- ABERCROMBIE, Nicholas, HILL Stephen and Turner Bryan S. (1980) *The Dominant Ideology Thesis*, London: Allen & Unwin
- ADAM Barbara (1990) *Time and Social Theory*. London: Basil Blackwell (=1997『時間と社会理論』伊藤誓・磯山甚一 (訳) 法政大学出版会)
- ADAM Barbara, BECK Ulrich and van LOON Joost (Eds.) (2000) *The Risk Society and Beyond*, London, Thousand Oaks and New Delhi: Sage
- BECK Ulrich (2000) "Risk Society Revisited: Theory, Politics and Research Programmers", in ADAM Barbara, BECK Ulrich and van LOON Joost (Eds.)
- BECK Ulrich, GIDDENS Anthony and LASH Scott (1990) *Reflexive Modernization*. Cambridge: Polity (=1997『再帰の近代化』松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三 (訳) 而立書房)
- Biagioli, Mario (Ed.) (1999) *The Science Studies Reader*. New York and London: Routledge
- BIJCKER Wiebe. E., HUGHES Thomas P., and PINCH Trevor J. (Eds.) (1987) *The Social Construction of Technological Systems*. Cambridge, MA: The MIT Press
- BODEN Deidre. and MOLOTCH Harvey L. (1994) "The Compulsion of Proximity" in FRIEDLAND Roger and BODEN Deidre (Eds.) *NowHere: Space. Time and Modernity*, Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press. 257-286
- BRAH Avtar, COOMBES Annie E, LEWIS Randolph, PHOENIX Ann (Eds.) (1997) *Feminist Review: Consuming Cultures*. 55
- BROOKS Gardner C. (1994) "Out of Place: Gender, Public Places, and Situational Disadvantage" in FRIEDLAND Roger and BODEN Deidre (Eds.) *NowHere: Space. Time and Modernity*, Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press. 335-355
- CALLON Michel (1986) "The Sociology of an Actor-network Theory: the case of the electric vehicle" in CALLON Michel, LAW John and RIP Arie (Eds.) *Mapping the Dynamics of Science and Technology*. London: Macmillan. 19-34
- CALLON Michel (1987) "Society in the Marking: the study of technology as a tool for sociological analysis" in BIJCKER Wiebe E., Hughes, T. P., and PINCH Trevor. (Eds.) *The Social Construction of Technological System: New Directions in the Sociology and History of Technology*. Cambridge, MA: MIT Press. 83-103
- CALLON Michel, LAW John. and RIP Arie (Eds.) (1986) *Mapping the Dynamics of Science and Technology*. London: Macmillan
- DENNING Peter J. and METCALFE Robert M. (Eds.) (1997) *Beyond Calculation*. New York: Copernicus, Springer-Verlang (=1998『未来社会におけるコンピュータ』佐藤洋一 (監訳) トッパン)
- du GAY Paul (1996) *Consumption and Identity at Work*. London: Sage
- du GAY Paul, HALL Stuart, JANES Linda, MACKAY Hugh and NEGUS Keith (Eds.) (1997) *Doing Cultural Studies: the story of the Sony Walkman*, London: Sage
- ENGESTROM Yrjo (Ed.) (1990) *Learning, Working and Imagining*. Helsinki: Orienta- Konsult Og
- FRIEDLAND Roger and BODEN Deidre (Eds.) (1994) *NowHere: Space. Time and Modernity*, Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press
- GIDDENS Anthony *The Constitution of Society*. Cambridge: Polity
- GOODMAN Nelson (1978) *Ways of Worldmaking*. New York: Harvester Press. (=1987『世界制作の方法』菅野盾樹・中村雅之 (訳) みすず書房)
- HALL Stuart and JACQUES Martin (Eds.) (1989) *New Times: the changing face of politics in the 1990s*. London: Lawrence and Wishart
- HARDT Michael and NEGRI Antonio (2002) *Empire*. Cambridge, MA and London: Harvard University Press
- JAMISON Andrew (1996) "The Shaping of the Global Environmental Agenda: the role of non-governmental organizations" in LASH Scott, SZERSZYNSKI Bronislaw and WYNNE Brian (Eds.) *Risk Environment Modernity: Towards a New Ecology*. London: Sage
- KAUFFMAN Stuart (1995) *At Home in the Universe*. Oxford: Oxford University Press.

- KLEIN Naomi (2001) *No Logo*. London: Flamingo
- LASH Scott (2000) "Risk Culture", in ADAM Barbara, BECK Ulrich and van LOON Joost (Eds.)
- LASH Scott (1990) *Sociology of Postmodernism*. London: Routledge (=1997『ポスト・モダンティの社会学』田中義久 (監訳) 法政大学出版会).
- LASH Scott and URRY John (1994) *Economies of Signs and Space*. London: Sage
- LASH Scott, SZERSZYNSKI Bronislaw and WYNNE Brian (Eds.) (1996) *Risk, Environment and Modernity: Toward a New Ecology*. London: Sage
- Latour Bruno (1996) *Aramis, or the Love of Technology*. Cambridge, MA. and London: Harvard University Press
- LAVE Jean (1988) *Cognition in Practice*. Cambridge University Press (=1995『日常生活の認知行動』武藤隆 (他訳) 新曜社)
- LAVE Jean and WENGER Etienne (1991) *Situated Learning*. Cambridge: Cambridge University Press (=1993『状況に埋め込まれた学習』左伯胖 (訳) 福島真人 (解説) 産業図書)
- LUHMANN Niklas (1990) *Essays on Self Reference*. New York: Columbia University Press (=1996『自己言及性について』土方透・大澤善信 (訳) 国文社)
- LUNT Peter K. and LIVINGSTONE Sonia (1992) *Mass Consumption and Personal Identity*. Buckingham: Open University Press
- LURY Celia (1996) *Consumer Culture*. Cambridge: Polity, 1996.
- MACKAY Hugh (Ed.) (1997) *Consumption and Everyday Life*. London: Sage / The Open University
- MACNAGHTEN Phil and URRY John (1998) *Contested Natures*. London: Sage
- MATURANA Humberto R. and VARELA Francisco J. (1980) *Autopoiesis and Cognition*. Dordrecht: D. Reidel (=1991『オートポイエシス』川本英夫 (訳) 国文社)
- McROBBIE Angela (1996) "Looking Back at New Times and Its Critics" in MORLEY David and CHEN Kuan-Hsing (Eds.)
- McROBBIE Angela (1998) *British Fashion Design*. London: Routledge
- MORT Frank (1996) *Cultures of Consumption*. London: Routledge
- Nava, Mica (1992) *Changing Cultures: Feminism, Youth and Consumerism*. London: Sage
- Norman Donald A. (1992) *Turn Signals Are the Facial Expression of Automobiles*. New York: Addison-Wesley
- Norman Donald A. (1997) *The Invisible Computer: Why Good Products Can Fail, the Personal Computer Is So Complex, and Information Appliances Are the Solution*. Cambridge, MA: The MIT Press (=1998『コンピュータが脳のようには動かないのはなぜよいか』P.J. デニング / R.M. メトカルフェ (編))
- OGAWA NISHIAKI Yoko (1992) "Landscape of American Nationalism: the making of Central Park, New York, in Euro-American relations", 一橋研究, 17 (3). 45-46.
- OGAWA NISHIAKI Yoko (2000) *Taming Global Environment/ Re-appropriating techno-science: Hierarchies of technologies and flows of culture in sustainable automobile design*. Investigating Design Process, The Society for Social Studies of Science and The European Association for the Studies of Science and Technology Joint Conference 2000, Final Abstract Book. Wein: University of Vienna.
- OGAWA NISHIAKI Yoko (2001) *TOKYO STYLE, or, the Prospect of Living Otherwise: Mobility, dwelling and technologization of Tokyo Metropolis*. Techno-locals and Portable Places, Information Technologies, Congress of the Society for Social Studies of Science 2001, Cambridge M.A.: The University of Massachusetts
- OGAWA NISHIAKI Yoko (2004) 「アフォーダンス概念の拡張によるグローバルでローカルな環境のデザイン」『2000～2003年度 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書 (研究課題番号: 12610199)』
- ORR Julian E. (1990) "Sharing Knowledge, Celebrating Identity: community memory in a service culture" in MIDDELETON David. and EDWARDS David. (Eds.) *Collective. Remembering: Memory in Society*. Beverley, CA: Sage
- ROSENAU James N. (2003) *Distant Proximities: Dynamics beyond Globalization*. Princeton and Oxford: Princeton University Press
- SASSEN Saskia (1996) *Losing Control?*. New York: Columbia University Press (=1999『グローバル化の時代』伊豫谷登士翁 (訳) 平凡社)
- SUCHMAN Lucy (1998) "Human/Machine Reconsidered" 『認知科学』5 (1). 5-13
- URRY John (1995) *Consuming Places*. London: Routledge
- URRY John (1998) "Globalisation and Citizenship" *Paper given to World Congress of Sociology*, Montreal, July.
- WILLIAMS Raymond (1989) *Resources of Hope*. London: New Left Books
- WILLIAMS Shaw (2001) *Biological Treatments for Autism and PDD*. Great Plains Laboratory (=2011『自閉症と広汎性発達障害の生物学的治療法』コスモトゥーワン)
- World Commission on Environment and Development, United Nation (1987) *Our Common Future*. Oxford University Press

●謝 辞

第6節の記載内容については、東京大学大学院総合文化研究科太田邦史教授に貴重なご助言を受けた。記して感謝したい。

小川(西秋)葉子 (慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所専任講師)